



かなみ仏の里
ものがたり

かんちゃんなみちゃんの夏休み

鈴木 克子



僕のお母さんの故郷は、山また山の原生林、その先は箱根山、ぐるりと山並みに囲まれた自然豊かな函南町桑原です。

僕の名前は幹太、みんなからかんちゃんと呼ばれている東京の小学五年生、妹の菜実ちゃんは二年生、二人合わせて「かんなみ」。

この名前のせいか「函南」が大好きな兄妹です。

小さい時から両親と桑原の家へ遊びに来ていましたが、お母さんは勤めていたし、おじいちゃんおばあちゃんはお店をやっていたので長くは泊まりませんでした。

ところが今年の夏休みは違いました。

それはお父さんが交通事故に遭い入院したので、お母さんは勤めと病院通いがあるため、僕となみちゃんは、夏休み中桑原のおじいちゃんおばあちゃんの家で過ごすことになったのです。僕は五年生だから自分のことはできるがお店の手伝いや妹の世話がちゃんとできるだろうかと少し不安でした。

でも歴史の好きな僕は夏休み中桑原でやりたいことがあったのです。

それは桑原にかんなみ仏の里美術館ができたこと。

おじいちゃんがボランティアガイドを引き受けていること。

以前から函南や桑原の歴史を研究していることを知っていたので、夏休み中おじいちゃんから教えてもらうのを楽しみに函南駅ホームに降り立ちました。

お母さんは辺りを見渡して、

「いいわねえふるさとは……、東京に比べて空気が美味しいわ」と大きく深呼吸しました。

「あれっ、この前来た時になかったエレベーターがあるよ」

僕が指さす方を見て、両手に大きな荷物を持ったお母さんは、

「本当！ 便利になったわねえ」

と嬉しそうに言いました。

改札口ではおじいちゃんがにこにこ笑顔で待っていてくれました。

桑原の家ではおばあちゃんが、

「よく来た、よく来た、ゆっくりしていくといいよ」

いつもの優しい笑顔で迎えてくれました。

「ありがとう。でも私明日東京へ帰ります。夏休み中幹太と菜実をお願いします」

とお母さんが言ったので、僕となみちゃんはぺこりと頭を下げました。

「幹太は五年生だし菜実も二年生だから自分のできることはして、おじいちゃんおばあちゃんのお手伝いもできるわね」

「うん、大丈夫だよ」

お母さんに心配をかけまいと僕はいつもより元気な声で言ったが、なみちゃんはうつむいてこつくりうなずき、明日のお母さんとの別れを思っただけ涙ぐんでいました。

翌朝、お母さんを函南駅で見送ってから、

「今日は、かなみ仏の里美術館へ行こうね」

と涙をぬぐっていたなみちゃんの頭をやさしくなぜながらおじいちゃんは言いました。

「この前僕たちが来た時にはまだ出来ていなかったね。すごく立派な美術館だなあ」

僕はびっくりして言いました。なみちゃんも、

「きれいな所ね、おじいちゃん」

と少し笑顔を見せて言いました。

「この美術館はね、日本でも有名な建築家栗生明氏くりやうが建てたんだよ。ここはね、その昔桑村小学校があった所でお前たちの母さんはここに通学していたのだが、校舎が古くなり運動場も狭いので、高台の広い新しい学校へ移転したんだよ」

「なぜ桑原に仏様の美術館ができたの？」

「それはね、ここ桑原には仏様の長い長い歴史があるからだよ」

おじいちゃんは遠い昔を懐かしむかのように話してくれました。

「桑原の里には一二〇〇年前、新光寺というとても大きなお寺が建てられたという記録が残されている

んだよ。でもお寺は焼けてなくなり鎌倉時代に再び作られたが、またまた野火や戦さの火事で焼けてしまったんだ。そのたび里の人たちはなにを置いても駆けつけ、仏様を抱きかかえたりおんぶして安全な所へ移したんだよ」

「火の粉が降り注いで熱かったろうに……」

「そうだよ、しかし信仰心の厚い里の人たちは平安時代の薬師如来様や鎌倉時代の阿弥陀三尊像など二十四体の仏様たちを長い年月どんな時でも守ってきたんだよ。そして明治三十年代後半に二十四体の仏様を保存するため、長源寺裏山の中腹に桑原薬師堂を建て、平成二十年に函南町に寄付したんだ。村人たちだけで守るにはお金がかかるし、貴重な文化財を多くの人たちに鑑賞し学んでもらうために、かなみ仏の里美術館が作られたんだよ」

おじいちゃんの説明を聞いて僕は長い間仏様たちを大切に守ってこられた桑原の皆さんのことがわかったような気がしました。

仏様たちが安置されている館内はうす暗い照明で仏様たちを優しく照らしていました。

「薬師如来様は左手に薬つぼを持っていらっしゃるよ。薬師如来様は困りごとや病気の快復を祈ると救われるという言い伝えがあるんだ。それと薬師如来様の周りには十二神将が安置されていてお守りしているんだ。ほら頭をよく見てごらん。それぞれ牛や虎などの十二支の動物を付けているよ。そして鎧を着て剣などの武器を持っているんだ」

「なぜ十二支の動物が付いているの？」

となみちゃんは不思議そうに聞きました。

「それはね、時刻や方角を示しているそうだよ」

とおじいちゃんは優しく言いました。

「阿弥陀如来様はね、親指と人さし指で輪を作り、極楽浄土から亡くなられた人をお迎えにくるお姿をしているからすぐわかるよ。それと両脇には勢至菩薩様と観音菩薩様がついておられるよ。仏様は位によつて如来、菩薩、明王、天、の四つに分けられていて、如来様は悟りを開いた者という意味で仏様の中でも一番偉くて、他の仏様を指導するリーダーと言われていているそうさ。かなみ仏の里美術館の阿弥陀如来様は国の重要文化財に指定されているんだよ」

阿弥陀様をじっと見つめていたなみちゃんは、

「なんだかお父さんに似ている」

とひとりごとを言いました。

朝の涼しいうちに宿題とお手伝いをすませた僕となみちゃんに、

「今日は新光寺の跡地と白山神社へ行ってみよう」

とおじいちゃんは言いました。新光寺の跡地は今は田んぼや畑となっていて、大きな椅子の形をした

石がポツンと残っているだけでした。

「今から一二〇〇年前に箱根神社に万巻上人という偉いお坊さんがいらしてね、上人は嵯峨天皇の命を受けて都へ行く途中高齢のため亡くなられたんだよ。上人のお骨や仏様たちやお経を持って箱根神社へ戻ろうとしたのだが、山坂は険しく道のりは困難を極め、ここ桑原にお寺を建てお骨を納め仏様たちを祀ることにしたそうだ。これが新光寺の起こりと伝えられているんだよ。それで箱根神社のことを大筥根、ここ桑原のことを小筥根と言ったんだ」

「箱根神社と深いつながりがあったんだね」

僕は仏様を大切に守ってこられた桑原の村の皆さんの想いを強く感じ、原生林箱根山へと続く山並みを見つめました。

次におじいちゃんは新光寺跡地のすぐ近くの白山神社はくさんへ案内してくれました。

「ここが白山神社で新光寺を護る神社として伝えられているんだよ。ここには、カゴノキとして幹に鹿の子模様に似た白い斑点のある巨木があるよ。ほら見てごらん、これがカゴノキだよ」

おじいちゃんは神社の建物の後ろに廻ってカゴノキを指さしました。

「本当！ 鹿の皮を着ているみたいだ！」

僕はびっくりして言いました。なみちゃんも、

「おもしろい模様ね」

と幹をさすりながら言いました。

「カゴノキとしては静岡県第一位の樹齢を誇っているんだよ」

「すごいねえ、この根っこも！」

僕となみちゃんは力強く盛り上がっている太い根っこをさすりながら言いました。

おじいちゃんは函南町の図書館にも連れて行ってくれました。

図書館は川の土手を背に左右田んぼに囲まれた自然豊かな所にあり、入口には、知恵の和館と書いてありました。

「小さな子どもたちの遊具もあり明るくて温かみのある図書館だね」

「知恵の和館という名前も素敵だし、小さな子どもたちがお母さんと一緒に楽しめている所ね」

と言いながら一階の児童図書室に入り沢山の本がズラリと並んでいるのを見て、なみちゃんはにっこりしました。

僕は『ゼロから始めるお寺と仏像入門』、『奈良の大仏』、『仏像がわかる絵事典』等を手にして夢中になって読みました。

その後もおじいちゃんは僕たちを知恵の和館に連れて行ってくれました。いつしか僕は京都、奈良の仏様たちに会いたいという夢がふくらんできました。

入道雲が沸き上がっている真夏の空を見上げておばあちゃんが、

「今日も暑くなりそうだねえ。今日は涼しい所へ連れて行ってあげるといいですよ」

「そうだね。桑原には三つの滝があるけれど今日はそのうちの二つ、観音滝とお鶴が磐石の滝へ行ってみよう」

おじいちゃんの運転する車はどんだん山の中へ入って行きました。

心細くなったのかなみちゃんは、

「おじいちゃん、どこまで行っても山の中だねえ」

「そうだね。ここは函南原生林と言って不伐の森で、昔から木を切らない掟が作られているんだよ。それはね、ここが下流の函南町や三島市の水源となる森林だから、先祖代々保護されているんだよ。森林の土は雨を沢山吸い込んで貯えゆっくり時間をかけて流れ出すんだ。そして下流の田畑を潤し飲み水にもなるんだよ」

「大切な森なんだね」

「そうなんだよ。今でもできるだけ人の手を入れないで森林組合が管理しているんだ」

「ここが観音滝だよ。源泉は函南原生林や上流の山々からの伏流水が滝となって水が絶えることがないんだよ。伏流水とはね、地上の水の流れがある場所だけ地下を潜って流れることや、またその地下の水

流のことを言うんだよ」

なみちゃんは落差十八メートルの滝を見上げて、

「ずい分高い上の方から流れてくるんだねえ」

とびっくりして言いました。

僕は滝の水にさわって、

「わあ！ 冷たくていい気持ち！ なみちゃんもさわってみてごらん」

さわったなみちゃんにはっこりしました。

原生林に囲まれた観音滝の周辺は真夏だというのに天然のクーラーに包まれているようでした。

「さあ、次はお鶴が磐石の滝へ行こうね」

広い道から狭くて曲がりくねった山道を行くと、木々に囲まれてひっそり静まりかえったお鶴が磐石の滝へとたどり着きました。

「この滝はお鶴という少女の名前と磐石という地区の名がついた滝なんだよ」

おじいちゃんの説明に、

「お鶴という少女がどうかしたの？」

と僕は聞きました。

「昔々のお話だけとお鶴という少女がこの滝の近くでわらび取りをしていたのだが、行方がわからな

くなくなってしまったそうさ。村人たちや家族がいくら捜しても見つからない。かわいそうに思った村人たちは、お鶴のことを忘れないようにこの滝のことを、お鶴の名前と地区の名を付けて、お鶴が磐石の滝と呼ぶようになったそうだよ」

「こんな山の中へ一人で来たらあぶないよ」

「そうだね、かんちゃんの言う通りだよ」

なみちゃんはおじいちゃんの手をしっかりと握りしめておりました。

今日はお店の配達があるので僕は軽トラックに荷物を運び、なみちゃんがお店のお掃除をしていると、
「あれっ？　かんちゃんとなみちゃんじゃないの、夏休みで遊びに来たの？　お手伝いをしてえらいねえ」

お店にやってきた近所の小母さんが言いました。

僕たちは元気よく挨拶しました。

「こんにちは、大きくなったわねえ、お手伝いもするし本当に良い子に育ったわ」

「お陰様で。二人がいると助かるし賑やかでいいですよ」

おばあちゃんは嬉しそうに言いました。

僕はおじいちゃんと一緒に配達に出掛けました。

「なみちゃんはおばあちゃんとお店番するかい？」

「うん」

なみちゃんにはっこりうなずきました。

「こんな可愛い子が売り子さんだったらお店は繁盛するねえ」

と小母さんは言っておばあちゃんと二人で楽しそうに笑いました。

「さあ今日は長源寺と薬師堂、そしてその上にある伊豆桑原四国三十三所観音霊場へ行ってみよう」

長源寺にはカヤ、カシ、シイ等の巨木が繁っていて真夏の日差しが遮られていてひんやりとしていて涼しい。

「仏の里美術館に展示されている薬師如来様、阿弥陀如来様、十二神将はこの薬師堂に祀られているんだよ。その頃桑原のおばあちゃん達はここで毎月十二日には集ってお供え物をして、鐘や太鼓を鳴らしてお念仏を唱えていたんだ。日照りが続いた時には雨乞いをしたり、赤ちゃんができたと聞けば無事生まれるように祈り、生まれたらお礼参りをしたんだよ。その行事は村人たちの大切な楽しみでもあったんだ」

「村人たちにとって喜びも悲しみもいつも仏様と一緒にだったんだね」

「その通りだね。今ではこの地、薬師堂がパワースポットとして日本各地から外国からも人々が訪れて

いるそうだよ。さあ、この上の伊豆桑原四国三十三所観音霊場へ行ってお参りをしよう。階段が急だから足元に気を付けて上がろう」

「どうしてここに観音霊場が作られたの？」

「観音信仰の一つで観音菩薩が人々を救う時に、三十三の姿に変化するという信仰があるんだよ。それに基づいて三十三の霊場を巡ることにより、この世で犯したあらゆる罪が消えて極楽へ行けると考えられたんだ。観音巡礼は平安時代の頃より始まり江戸時代になって、世の中が平和になって庶民の間で盛んになったそうさ。特に四国三十三か所、坂東三十三か所、秩父三十四か所を巡る百観音霊場巡りが流り多くの巡礼者が巡拝して、観音霊場巡りは栄えて現在に至っているんだよ。でも四国三十三か所巡りは近畿地方の二府五県約千キロを巡り、伊豆からの往復の道のりだけでも約七〇〇キロ以上あり、行きたくても大変な時間と労力、費用がかかるので行かれない。そこで一八〇六年、ここ桑原の地に巡礼したのと同じ功德を積みご利益を授かることができる写し霊場が近隣の村々の人たちの寄付金で完成したんだよ」

僕は石に彫られている観音様たちの優しいお顔にびっくりしました。

「お母さんのように優しいお顔をしている」

となみちゃんも言いました。

僕たちは一体一体に手を合わせお参りをしました。

「今日は桑原のもう一つの滝、不動の滝と高源寺へ行ってみよう」

高源寺に向かつて狭い道を行くと右手に冷川が流れていて左手人家のすぐそばにお堂があり、うす暗い木々の間から水が勢いよく流れ落ちていました。

「ここが、不動の滝だよ。滝の右手中腹に不動尊が祀られていて、お堂の中の小さな窓からも拝むことができるんだよ。この滝の上の方に湧き水がありそこから水が流れ落ちてくるんだ。冷川不動尊は本尊に赤不動明王を祀っていて創建は定かではないが、十二世紀終わり頃、文覚上人により造られたと言い伝えられているそうだよ。真言宗の道場として栄枯盛衰を繰り返してきたが、今は桑原に住む十七戸の人たちが護り継いでいるそうだ」

不動の滝の滝壺にある大きな石は座禅石と呼ばれています。僕はこの石に座り滝に打たれて修行している修験者の姿が目に見えませんでした。

高源寺はそこから細い山道を車でかなり行きました。

「高源寺は真言宗の開祖、空海によって開かれた山岳宗教の聖地で、空海は万巻上人を京へ招いた嵯峨天皇と深いつながりがあったのだよ。又ここが鎌倉幕府を築いた源頼朝旗上げの寺としても有名なんだ。頼朝の乳母であった比企の局の墓といわれる五輪塔があり、比企の局はこの近くに住み葦山の蛭ヶ小島へ通い頼朝のお世話をして、文覚上人と共に源氏再興に尽力したといわれているよ。文覚上人は平安時

代後期から鎌倉時代前期にかけての武士で真言宗の僧侶であり、京都神護寺の再興を後白河天皇に強く訴えた為伊豆に流されたんだよ。同じく伊豆に流されていた源頼朝と知り合い、源氏再興の密議を交わすなど親交があったんだ。頼朝が鎌倉に幕府を開くと罪を許されて、神護寺、東寺、高野山の大塔、東大寺などの再興に尽くしたそうさ。空海は嵯峨天皇、橘逸勢たちはなのはやなりと共に三筆の一人にあげられ嵯峨天皇に気に入られて信頼を得るようになったそうさ。八一六年に高野山を与えられ三年後に金剛峯寺を建立、八二三年に京都の東寺を与えられ死後、弘法大師の称号を贈られたそうさ。高源寺入口にはかつて桑原にあった新光寺の奥の院としての総門が立ち、菊の御紋章が付いているんだよ。これが総門であそこに菊の花の彫り物が付いているのがわかるかな？」

おじいちゃんが指さすとなみちゃんは、

「あっ見えた！」

と嬉しそうに言いました。

高源寺の参道は大木が繁っていてうす暗く感じたが、そこを抜けると明るい広場で奥にどっしりとした大きな本堂がありました。

「ここが源頼朝の石橋山合戦出陣旗上げの軍勢ぞろいの地だよ。高源寺は一一九〇年野火のため焼失したが頼朝が鎌倉入り後、桑原小笠根権現付近に七堂伽藍の新光寺を建立したんだよ。高源寺を新光寺の奥の院として再建したがまたまた二回も野火のため焼けてしまった。でも凶面が残っていたので昔のま

ま再建されているんだよ」

僕が広場に立つと大勢の武士達と馬で本堂前の広場が埋め尽くされ、甲冑の擦れ合う音や馬のいななきが聞こえてくるようでした。

夏休みも残り少なくなった頃、お母さんから、

「お父さんが退院できるので迎えに行くから」

との嬉しい電話がありました。

「良かった、良かった、お母さんが迎えに来たら箱根へ行こう。箱根神社と万巻上人のお墓参りをしよう」

「それは良いことですね。箱根へはかんちゃんなみちゃんが小さい頃に行っただきりですよ」

とおばあちゃんは嬉しそうに言いました。

「僕ね、夏休みの宿題に函南町桑原の仏の里のことまとめたよ。おじいちゃんに桑原の歴史や仏様たちのことを色々教えてもらい、あちこち案内してもらったお陰だよ。図書館へも連れて行って調べて本当ありがたい。東京へ戻ったらお父さんお母さん、先生や友だちにかんなみ仏の里のこと教えてあげるんだ」

「そうかい、そうしてくれたらおじいちゃん本当に嬉しいよ。仏様たちも喜んでくださることだろう」

おじいちゃんは嬉しそうに目を細めて言いました。

「私ね、仏様たちや白山神社のカゴノキ、高源寺の菊の御門など色々描いたわ」

なみちゃんはスケッチブックを開いて見せました。

「なみちゃんは小さい時から絵が上手だったもの」

おばあちゃんは涙ぐみながら言いました。

数日後、僕たちを迎えに来たお母さんとみんなが箱根に向かいました。

八月も末の箱根は赤トンボが舞いスキの穂が風に揺れて秋の気配が漂っていました。

「万巻上人はね、一万巻の経典を読み仏教の奥義を広めた人なんだよ」

「だから万巻上人という名前が付いたんだね」

「そうなんだよ、そして箱根の山中で修行中、箱根の山の神のお告げを受けて箱根権現を建てたんだ。

ちょうどその頃芦ノ湖には九つの頭を持つ龍が棲んでいて、村人たちを大変困らせていたんだよ。万巻

上人は仏の力で祈り、龍の動きを鎮めて湖の神、九頭龍神社として祀ったんだ。万巻上人のお墓は奥津

城と言って箱根神社北参道入口にあるんだよ」

お父さんの順調な怪我の快復を箱根神社と万巻上人のお墓に感謝の心でお参りしました。

万巻上人のお墓から箱根神社へ戻る道すがらこの夏休みのことを反省してみました。

おじいちゃんのお陰で桑原や仏様たちの歴史を学ぶことができたこと。

おじいちゃんおばあちゃんのお手伝いもできたこと。

図書館で沢山の本を読めたこと。

なみちゃんの世話ほとんど手がかからなかった。東京では甘えん坊だったが桑原では自分のことをしっかりできたし、おばあちゃんのお手伝いもよくし頑張っていたと思う。

二人ともよい夏休みが過ごせたと思いつながら歩いていたらおじいちゃんが、

「今度京都奈良の仏様たちに会いに行こうね」

と言ってくれました。

「えっ、嬉しいな、まず始めに東大寺の大仏様に会いたいな」

と言うとなみちゃんも、

「私も！」

と嬉しそうに言いました。

僕たちを見てお母さんとおばあちゃんもにこにこ嬉しそうでした。僕たちのまわりをさわやかな秋の風が吹き渡っていきました。

参考文献

- 「函南伝承と創造の函南町」二〇一三年三月発行 函南町教育委員会生涯学習課
「函南町文化財だより vol. 17」二〇一五年三月発行 函南町教育委員会生涯学習課
かななみ仏の里美術館パンフレット
箱根神社パンフレット

その他多数

かなみ^{ほとけ} 仏^{さと}の里ものがたり かんちゃんなみちゃんの^{なつやす}夏休み

2023 年 10 月 28 日 発行

著者 ^{すずき}鈴木 ^{かつこ}克子

町制施行 60 周年・かなみ知恵の和館 10 周年記念事業冊子

発行 函南町教育委員会

製本 函南町教育委員会生涯学習課（函南町立図書館）

電話番号 055-979-8700

419-0122 静岡県田方郡函南町上沢 107 番地の 1

当作品について転載・複製・複写・翻訳を著作者の許可なしに行うことを固く禁じます。

（著作権法上での例外を除く。）また、個人や家庭内の利用であっても、代行業者等の第三者に依頼して無断でスキャン及びデジタル化することはできません。

作品の著作権は著作者に帰属しますが、函南町立図書館は作品を永続的に無償で使えるものとして（主に公開にあたっての編集、印刷、配布、掲載に関すること）。ただし、当館は著作者の創作性を重視し、作品内容には関与しないものとします。

東京に住む兄妹、幹太と菜実は母の故郷である函南が大好き。夏休み、二人は桑原の祖父母宅で過ごす。そして祖父から町内にある仏像や滝など、歴史ある物や場所について沢山教わることに。兄妹と学ぶ物語。

